

## 心象スケッチ

## 賢治と八十とみすゞ

木原豊美

## はじめに

まもなく『宮沢賢治が切り拓いた世界とは何か』という論集が、笠間書院から刊行される。佐藤泰正編・笠間ライブラリー・梅光学院大学公開講座の第63集である。執筆者は『宮沢賢治語彙辞典』の著者、宗教家、詩人、大学教授で日本近代文学研究家達で占められている。寄稿されている先生方は、「宮沢賢治賞」等の受賞者をはじめ、賢治研究にとっては欠かせない先生方ばかりである。ひとえにわが国の近代文学の泰斗で、平成9年（1997）第7回宮沢賢治賞受賞者の、佐藤泰正先生の存在であろう。そんな伝統と重厚な論集に、真に浅学菲才な私を交えてくださったのは、先生の英断である。平成25年（2013）12月、「賢治とみすゞを語ってください、面白いと思いますよ。」この思いがけない声かけが、今回の論集にまで繋がった。

## 2、キヤッチボール

先生から本当の意味の、学問の真髄とは何かという問を投げかけられた。それは論集編者である先生に出版社から届いた、私の原稿への質問（電話）からはじまった。起因となったのは、次の一文である。

賢治は大正13年（1924）4月、『春と修羅』を刊行。添付した「心象スケッチ」ということは、大正8年（1919）の西條八十の処女詩集『砂金』自序から影響を受けたとも。（賢治の口語詩「会食」には、八十の「柚の林」「柚の実」西條八十はみすゞの師。

これは先に述べた原稿の終わりに、八十とみすゞの類似点と相違点を記したものだ。その類似点のひとつに、二人に共通する人物として西條八十をあげた。先生との会話は、次のようなものであった。「木原さん、賢治の「心象スケッチ」ということは、西條八十の影響があるというのは、どのような根拠からでしょうか？」

「はい、原先生の語彙辞典に、八十の『砂金』との関係が書いてありました。」

「『砂金』は読まれましたか？」

「いいえ。」

「みずゞは賢治の作品を読んでいたと思われませんか？」

「いいえ、はっきりしたことは分かりません。」

「八十の作品は、みずゞに影響していますか？」

「はい。」

「八十の全集は読まれましたか？」

「いいえ。」

数日後、97歳の先生は『西條八十全集』を、手渡してくださいました。

正直に申すと八十全集は、かつて手にしていた。しかし単に目を通しただけで決して、読んだことではなかったのだ。何よりの証拠は先生の問に「はい」と、応えられなかったからだ。先生からの書籍の前に恥じ入りながら、なんと幸せ者かと「ほんとうの、ほんとうの師」に頭をたれる私であった。先生は常に「文学は人間学である」と行間を通して、人間のあり方を説いてくださっている。その先生から「学問の真髄」を、直球で問いただされたのだ。無謀だと思いつつも、何とか先生への返球という、キャッチボールをはじめたいと思った。

### 心象スケッチ

#### 1、どういう意味？

「心象スケッチ」といえば、単に賢治を象徴することばだと思ってきた。丁寧に向き合いたいと思う。手持ちの『日本語大辞典（1989年・講談社）』以下（日）とする。『広辞苑（2008年・岩波書店）』以下（広）とする、『定本 宮沢賢治語彙辞典（2013

年・筑摩書房）を練ってみた。「心象スケッチ」を一般の辞典では、見つけることはできなかったが、分解して呈示してみる。

「心象」 （広） 心意識に浮かんだ姿や像。心像。

（日） 想像力によって心の中に描かれる、感覚的・

具体的な姿や形。

「スケッチ」 （広） 概略・印象を絵や図に写しとること。

（日） 写生すること。

対して賢治語彙辞典では、およそ3200字に及ぶ多岐にわたる参考資料が記載されていた。「心象」の歴史から、要約してみたい。作品に「心象」という表現を見つけられる年代は、明治期であるものの、大正期でも一般的ではなかった。この「心象」という語を賢治以前に使った文人達は、次の通りである。

伊達源一郎・西條八十・タゴール・西田幾多郎・上田敏・北原白秋・小栗風葉・長与善郎等がある。

「心象スケッチ」という語は、「心象」に「スケッチ」ということばを重ねて表現した、賢治の造語であることを確信した。

#### 2、命名された「心象スケッチ」の発表

賢治が命名した「心象スケッチ」という接頭語をつけた作品の、発表順を紹介してみる。

①大正12年（1923） 4月8日

「心象スケッチ外輪山」（「東岩手火山」）（詩）・岩手毎日新聞掲載

②大正13年（1924） 4月20日

心象スケッチ『春と修羅』（処女詩集）・関根書店刊行

\*大正14年(1925)9月〜大正15年(1926)2月にわたって、「心象スケッチ」ということばを掲げた作品が発表された。代表のタイトルを紹介してみると、『銅鑼』(草野心平)「心象スケッチ 負景二篇」「命令」「未来園からの影」・『貌』(森佐二)心象スケッチ「春二篇」痘瘡(幻聴)「ワルツ第c z号列車」・『虚無思想研究』(辻潤)「心象スケッチ朝餐」などの同人詩誌である。

③大正13年(1924)12月1日

『イーハトヴ童話・注文の多い料理店』(処女童話集)・東京光原社刊行。

この童話集の接頭語は、「心象スケッチ」から「イーハトヴ童話」へと変わった。大正14年(1925)『赤い鳥』(鈴木三重吉主宰)1月号に、『注文の多い料理店』の1ページ広告の掲載は、あまりにも有名である。しかし、同号に金子みすゞの〈入船出船〉の掲載は周知されていない。尚「赤い鳥」の広告には、「心象スケッチ」という語は添えられていない。しかし今に残る(林風舎所蔵)大小の広告チラシ、新刊取扱店への新刊書ご案内のいずれもが、並々ならぬ、関係者のほとばしる思いに溢れている。中でも大きな広告チラシの「心象」・「心象スケッチ」ということは、まるで賢治の祈りが織り込まれているようである。それは、ふるさとイーハトヴへの尽きない恋慕と、単に児童を喜ばせるための童話ではないという強い思いが込められていた。ここで敢えて賢治の高ぶりを、広告文の「心象」・「心象スケッチ」より抜粋してみたい。

※文中の○の添付は原文通り。

・イーハトヴの遥かな北東、イヴン王国の遠い東へと  
考えられる。実にこれは著者の心象中に、このような情景を持つ

て実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

・深い掬いの森や、風や影、山の草や、不思議な都会、ベリーグ市迄続々電柱の列、それはまことにあやしくも楽しい国土である。この童話集の。一。列。は。実。に。作。者。の。心。象。ス。ケ。ッ。チ。の。一。部。で。ある。

・われらは田園の風と光との中からつや、かな果実や、青いじゅん菜を一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。

#### 賢治の「心象スケッチ」とは

すでに賢治の心象スケッチについて述べてきたが、誰にでも分かりやすい解説を見つけたので、一部を紹介したい。

心象スケッチ・・・信時 哲郎

「賢治は、自分の意識の中に浮かんだイメージ(見たもの聞いたものだけでなく、自分が思ったこと、幻覚や幻聴なども含む)を、できるだけ忠実に書き留めることを創作活動の基本に置き、それを心象スケッチと呼んだ(英語で mental sketch modifiedとも書いた)。こうした意識が最も強かったのは、賢治が2冊の本を刊行したころだろう。心象スケッチという名称は形式に与えられたものでなく、方法についてのものであったことがうかがえよう。賢治がこうした新しい名称(概念)を作ったのは、彼にとつて創作が、文学作品を意識したものであるより、むしろ宗教書や思想書、科学書に近い本、すなわち「歴史や宗教の位置を全く交換しよう」と(大正14年2月9日森佐一宛書簡より)した本であったためであろう。

〔宮澤賢治大辞典〕 渡部芳紀編・勉誠出版・平成19年8月

## 「心象」

### ——八十の『砂金』自序と賢治の『春と修羅』序——

賢治の「心象スケッチ」ということが生まれる一つに、八十の影響があるのではという説は、原子朗著『定本 宮澤賢治語彙辞典』にある。

「メンタルスケッチ (mentalsketch)」。恩田逸夫によれば、影響源としては西條八十『砂金』の自序等をあげている。西條のものは次のとおり。

「問々として去来し、過ぎては遂に捉ふる事なき梢頭の風の如き心象。迂遠な環境描写や、粗硬な説明辞を似てははその横顔ゴウガンをすらし得ない吾人が日夜の心象の記録を、出来得るかぎり完全に作り置かうとするのが私の願ひである」。西條の「心象」の語はタゴールの訳詩集（『ギタンチャリ』増野三良訳1915東雲堂）の序文に繰返される訳語「神と慕ふ心の心象」からの影響と思われる。この訳詩集を賢治も読んだにちがいない（テパインタール砂漠）とすれば、西條経由、賢治直接の摂取であるかもしれない。」

西條八十は大正8年（1919）6月28日・尚文堂より、処女詩集『砂金』を刊行した。タイトルは神秘的な象徴詩を完成した詩人で歌人の、三木露風の示唆を受けたとされている。（季刊詩誌『無限』第44号・昭和56年6月）。この詩集の自序で「心象」について八十は、次のように発し、締めくくった。

・詩作の態度としては。私は終始自分の心象の完全な複本カクシヤクを獲た  
いとのみ望んでいた。

・心象の記録者である以上、私がある心象の、強く正しき人間の  
心象であれかしとこいねがって居る事は云ふまでも無い。

ここで今一度恩田逸夫が、賢治の『春と修羅』の序に、八十の象徴詩集『砂金』自序の影響を見た文（「心象スケッチの源流」『賢治研究』昭和45年4月）を紹介してみたい。

\*「八十・・・詩作の態度としては、私は終始自分の心象の完全な複本カクシヤクを獲たいとのみ望んでゐた。」（ルビ原文）

\*賢治・・・「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」「これらは二十二箇月の／過去とかんずる方角から／紙と鈹質インクをつらね／（すべてわたくしと明滅し／みんなが同時に感ずるもの）／ここまでたもちつゞけられた／かげとひかりのひとくさりづつ／そのとほりの心象スケッチです」

また八十の「柚の林・柚の実」（『砂金』）は、賢治の「会食」（『春と修羅 口語詩編補遺詩篇』）に、影響を与えたことが窺える。

### 西條八十と金子みすゞ

金子みすゞは平成8年（1996）以来、小学校の教科書で、紹介されている。そのみすゞが師と仰いだのが、詩人・フランス文学者・童謡、歌謡曲の詞で著名な西條八十である。ペンネーム・金子みすゞ（本名・金子テル）は、信濃にかかる枕詞で、スズタケの異称である「ミスズタケ」に因んで、自身が命名したものである。

大正12年（1923）6月、4雑誌社に投稿した5作品のすべてが、9月号に活字となつて掲載された。『童話』に〈お魚〉・〈打出の小槌〉、『金の星』に〈八百屋のお鳩〉、『婦人倶楽部』に〈芝居小屋〉、『婦人画報』に〈おとむらひ〉であつた。注目すべきは選者が『金の星』の野口雨情を除いて、残りの3冊はすべて西條八十であつた。このことは師と仰ぐべき人が、既にこのとき西條八十であつたことを物語っている。

そして呼応するかのように、八十は『童話』9月号の選評で「この感じはちやうど英国のクリステイナロゼツテイ女史のそれと同じだ。閨秀の童謡詩人が皆無な今日、この調子で努力して頂きたいとおもふ。」と、無名の新人に最高の、エールを送つた。なお前記の〈おとむらひ〉は、大正13年（1924）10月『現代叙情小曲選集』（香蘭社）西條八十編集に収められた。しかし、遺稿集である3冊の手書きの手帳、『金子みすゞ全集』（1984・2 JULA出版局）の3巻にも収められていない。作品を詠めば、金子みすゞに必ず付く「童謡詩人」という冠頭語がたちまち消えてしまう。私が詩人として称したいゆえんである。デビュー作の一つである〈おとむらひ〉には象徴詩人・西條八十の影響は拭えない。

### おとむらひ

ふみがらの、おとむらひ、  
鐘もならない、お供もゐない、  
ほんにさみしいおとむらひ。

うす桃色のなつかしさ、  
憎い、大きな、状ぶくろ、  
涙ににじむインクのあとも、  
封じこめた花ビラも、  
めらめらと、分けなく燃える、  
焔が文字になりもせで、  
すぎた日のおもひ出は、  
ゆるやかに、いま  
夕ぐれの空へ立ちのぼる。

みすゞが目にしたと思われる、関連書物は次の通りである。

『砂金』（大正8年（1919）6月）

『鸚鵡と時計』（大正10年（1921）1月）

『西條八十・童謡全集』（大正13年（1924）5月）

著名な『砂金』の自序では詩作が「心象」に基づいたものであることが、具体的に述べられている。みすゞがこの「心象」を承知していたことは、充分推察できる。なお同書には詩人の「灰野庄平氏に献ず」として、「遠き唄 童謡九篇」が、収められている。その中に明らかにみすゞに影響したと思われる代表的な作品のタイトルと一部を紹介してみたい。

鈴の音

西條八十

王様の馬は

黄金の馬

御供の馬は

泥の馬

王様のお馬

金子みすゞ

王様のお馬は木のお馬

お供の馬は、土の馬

王様のお馬は金の馬

お供の馬は銀の馬

次に紹介するのは、雰囲気が似通った作品である。

手品

西條八十

こんな手づまが使ひたい。

お父さんに

お母さん。

姉さんの舞踏靴、

昨夜貰った巴旦杏、

竈のうへの黒猫に、

窓から見える帆前船、

教会堂の円屋根と、

屋根にとまつた白鳩と、

みんな纏めたそのうへに、

青いマントをおひかぶせ、

打出の小槌

金子みすゞ

打出の小槌を貰ったら

私は何を出しませう。

羊羹、カステラ、甘納豆、

姉さんとおんなじ腕時計、

まだまだそれより真白な

唄の上手な鸚鵡を出して、

赤い帽子の小人を出して

毎日踊を見ませうか。

いいえ、それよりかお話の

一寸法師がしたやうに

背文を出して一ぺんに

大人になれたらうれしいな。

明けりや

眞紅な薔薇になる。

こんな手づまが使ひたい。

みすゞには、自身の手による詩作に関する方法論や資料等は皆無である。八十作品の影響が色濃いなか、手がかりを得た。

## 金子みすゞと『西條八十童謡全集』

平成15年(2003)7月24日、みすゞが『西條八十童謡全集』を所有していたことが判明した。証言者は、みすゞの元・夫、宮本啓喜氏の長男、宮本喜一郎氏であった。大阪での出会いで、同伴者の田中和夫氏(下関在住)と共に得た。貴重な応答は次の通りであった。

「お父さんが残された本など、何かありましたか」

「・・・本ですか。今は手許に残っていませんが、子供の頃、父の書棚に不似合な本があったので、尋ねたことがあったんですよ。」

「何か、特徴があったのですか。」

「濃い緑の表紙でした。」

「お父さんは、何かおっしゃいましたか。」

「父は、西條八十が好きで女の人から貰ったと言っていました。」

喜一郎氏が子供心に印象的だった濃い緑の表紙の本は、『西條八十童謡全集』のことである。私は当然のことながら、ほるぷ出版の名著復刻の同書をすでにこの時、書棚に持っていた。本体もカ

バーもクロームグリーンに包まれた凡そ二百ページには幾枚もの付箋を挟んで親しんでいた。実に貴重な証言となった。

残念なことに宮本喜一郎氏は平成25年1月、79歳で鬼籍に入られたことである。

### 西條八十と金子みすゞの作品

次にみすゞの作品には、八十に共通するモダンな小道具や色彩が溢れている。作品から思いつくままだに、「ことば」を並べてみよう。

円屋根の教会堂・金の翅・扉・馬車・羊飼い・御殿・三つ星・青銅の豚・金のかむりのおひめさま・しらゆり鳥・十三人の泥棒・銀のヴェール・トランプ・ジャック・ダイヤ・ハート・スペード・クラブ・天使・神さま・七つ星・王子さま・かりうど・小びと・帽子・王様・女王・王女・人魚・魔法・世界中・白い鸚鵡・薔薇・クローバ・マドロス・かくれ外套・魔法の洋燈・七里靴・黄金の車の輪・黄金の卓子・星などなど。

いづれも八十とみまがうばかりである。そんな、言葉の背後から、時折鬱々と忍び寄ってくる、二人の母恋については今回触れないものの、「さみしさ」を詠った作品をご紹介しよう。

大正11年『童話』4月号

お月さん

西條八十

お月さん

ひとりなの？

大正14年『空のかあさま』

闇夜の星

金子みすゞ

闇夜の迷子の

星ひとつ。

わたしもやつぱりひとりなの。

お月さん

空の上

私は並木の

草の上

お月さん

いくつなの？

わたしは七つ

親なし子

お月さん

もうかへる

わたしもそろそろ

ねむたいの

おわりに

賢治、八十、みすゞの成育環境を次に留意して並べてみたい。

1 生誕地（現・地名）

2 家業と家族

3 家の宗教

あの子は女の子でせうか。

私のやうに

ひとりぼっちの、

あの子は

女の子でせうか。

- 4 成育期
- 5 最終学歴
- 宮沢賢治（1896～1933）
- 1 岩手県花巻市豊沢町  
（三陸大津波とは、賢治誕生、終焉の年に襲った津波をさす。）
- 2 資産家「宮沢マキ（一族）」の質屋の長男。  
一家は大変な読書家であった。
- 3 浄土真宗。父は求道者であった。小学校時代担任をはじめキリスト教に熱心な人と出会った。傍らには、生活困窮する農民の姿があった。
- 4 家業を継ぐことに苦悩し、家出をする。法華経に目覚めまことの道を求め続ける。
- 5 盛岡高等農林学校
- 西條八十（1892～1970）
- 1 東京都新宿区払方町
- 2 質屋を廃し父が開業した、石鹼製造業（我国の先覚者）、輸入石鹼販売等の裕福な三男。
- 3 父は厳格な、浄土真宗の信者。12歳でキリスト教に出会い、教会に通った。
- 4 読書家の一方、感動した物語を再々従業員に披露。13歳、凱旋の将軍・乃木希典の私邸に、父の名代として「乃木ムスク石鹼」を、献呈し頭を撫でられる。14歳で英詩〈雨の日〉の訳詩は、評論家・ロシア文学者の片上伸に絶賛される。
- 5 早稲田大学

- 金子みすゞ（1903～1930）
  - 1 山口県長門市仙崎町
  - 2 漁業中心の中、教科書取扱店の少女（下関の書店経営者、叔母夫妻が、亡き父・養子にした弟の代償とし出店援助）
  - 3 浄土真宗、お寺が開く日曜学校に通う。
  - 4 読書家で、聞き分けのよい大人しい少女であった。16才で下関へ再婚していく母を見送った。
  - 5 大津高等女学校
- 三者を並べてみると、全く異なる成育環境である。しかし、不思議なくらい、共通点も浮かびあがってきた。
- 1 一家の暮らしに根付いた宗教心
  - 2 読書家
  - 3 進学
- 更に共に、感受性の鋭敏さは尋常ではなく、誰もが感じるもの以外と、心通わせていたことは事実であろう。この三者の「心象スケッチ」が生み出したものは、山のような作品群だ。その一部にしか対峙していない私ではあるが、素直な感想をまとめたい。
- 賢治
- 読む度に、つかみきれない程大きく聳え立つ。しかも新しい発見を提供してくれる。心がざわついた時、たまらなく読みたくなる。難解な言葉も、繰り返し付き合えば「このことはこそ一番的確だ！」と納得してしまう。音も色彩と共に動き出してくる。
- 八十
- 美術館に行つて、絵画を目の前に行っているようだ。油絵・水彩・



パステル・そして日本画。童話の世界も豪華な装丁の絵本のようにだ。

みすゞ

実に身近で、人生の悲哀と機微にみちている。誰にでも分かる誰もが口にする「ことば」で構成されている。しかし紡がれた世界は、読み手の人生や年齢に応じて広がりとお興行きを連れ、目前に映像が立ち上がってくる。賢治と同様に、登場するあらゆるものは、すべて人間と対等である。

「心象スケッチ」ということばから始まったのが、本論である。賢治・八十・みすゞ作品への取り組む真摯な姿勢や、その「ことば」に秘められた方法論等を探すはずであったが、紆余曲折した。「心象スケッチ」という賢治の造語は、人間が生きたために根源的なものと向き合うための、哲学的なことばであろう。しかし、実は人間誰もが持ち合わせているのではないだろうか。一番厄介な、生き物である人間の心に、絶えず去来する思いであり、幻想であろう。瞬時に消えては流れ、流れては湧き上がる思いである。時には、この幻想の、シナリオに振りまわされもする。凡人である私は、この思いをとらえる術もなく、日々を重ねている。対して、この「思い」をジャンルを超えてスケッチしているのは、表現者達であろう。殊に「スケッチしてことばに紡ぐ」作業に挑んだのが、文人達ではないだろうか。賢治をはじめ、世界の文人達が、「ことば」と格闘し続けたことは、作品の行間や推敲のあとに見ることができる。

正に文人達の生命いのちを削って生まれたのが作品である。佐藤先生の力強く説かれる「文学とは生きる力だ」の声が聴こえてくる。そし

て文人達の残した「ことばの力」に、哀しみの出口と希望への入り口を見つける私である。

最後に佐藤先生が今も尚、文学を通して、生き方を先導してくださる講義に感謝は尽きない。

木原 豊美

二〇一五・三・四

追

佐藤先生、ありがとうございます

二〇一五年春、先生と私の始まったばかりのキャッチボール。その原稿に先生は又しても、思いもかけない「ことば」を下さった。

「論集に、お出し下さい。」

十一月三日、校正原稿を前にした矢先、先生の訃報が届いた。涙がとめどなく湧いてきて、なにもできなくなってしまった。

十二月中旬、静かで優しい先生の笑顔を、身近に感じられるようになってきた。心の中の先生と「賢治」や「みすゞ」についてのキャッチボールを、続けたいと思えるようになった。

先生、本当に本当に、有難うございました。

二〇一五・十二・二十九  
(きはら とよみ)